

9・4 水俣まで全通し、線名を山野線と改めたものである。(森 梯 寿)

やまもとしきそうしゃほう 山本式操車法 山本龍也が昭和26年に、「能率的貨車操車法」として発表した貨車操車法に関する理論である。これによってわが国で初めて操車法に関する科学的体系が確立された。以下はその概要である。

1 操車現示法

駅名はすべて数字で表示し、自駅に最も近い駅あての貨車から、順次1, 2, 3, …と名付ける。同一駅行の貨車が連続している場合には、駅名の数字の右下に小字で合計両数を添記して表

わす。図-1は操車現示法の一例であって、編成が後部から3・1・2・3₂・2・1という順序であって、この貨車群を3₂・2₂・1₂の駅順に入換する場合である。突放車は分岐点の垂線の左側に、分解作業の順序にしたがって、左から右に順に記入する。引上線に引上げた貨車は、分岐点の右側に、上から下に記入する。突放回数をA、引上回数をB、操車回数をNとすれば $N = A + 2B$ となる。これらの3つの数字を記載するには、分数の形で、 $\frac{N}{A:B}$ とする。

2 貨車分解法

(1) 引抜法 あらかじめ仕訳線の使い方を定めておき、必要な駅順の貨車だけを引抜いて、他の貨車は雑放線に仮預けし、つぎに雑放線からふたたび貨車を引出して、この操車を繰返し、順次駅順整理を行う方法である(図-2)。

(2) 二重分解法 まず全編成を全線に仮預けし、その後1線ずつ駅順整理を行う方法である(図-3上)。

(3) 逐次分解法 あらかじめ仕訳線の使い方を決めておかないで、同駅または駅順をそろえ、かつ若い番号の車が前になるように、引上貨車群の前方から逐次分解してゆく方法である(図-3下)。

3 貨車組成法

(1) 一駅法 最遠駅から最寄駅へ順次、1駅ずつ組成線に転載する方法である。

(2) 一線法 最遠駅から最寄駅へ順次、駅順に分類整理された貨車を仕訳線1線ごとに引上げて、組成線に転載する方法である。

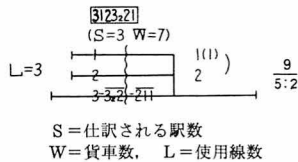
(3) 一括法 駅順に整理された貨車を、各線から最寄駅より順次、1線ごとに引上げて、全線の貨車を全部引上げてのちに、一括して組成線に転載する方法である。

4 能率的貨車操車法

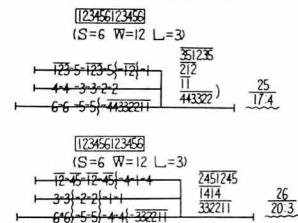
(1) 操車回数の減少法

第1法 分割操車を避け一括操車 (1則) 同一駅は切離さず、必ず一括して操車する (2則) 連続駅順貨車は、できるだけ一

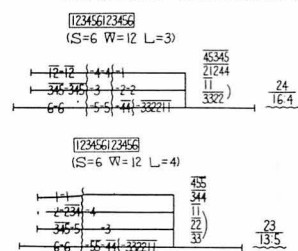
1. 操車現示法



2. 引抜法 (1, 2)



3. 二重分解法(上)・逐次分解法(下)



括して操車する (3則) 駅順に揃った貨車はなるべく分割しない (4則) 奇数または偶数駅を揃えると、後の作業に便利ながことが多い (5則) 分解はなるべく大きく仕訳する (6則) 組成はできるだけ一括法による (7則) 仕訳線の有効長が不足するおそれのある分解は、なるべく奥の線を使用する (8則) 使用線数をできるだけ少なくする。

第2法 二重操車を避け直接操車 (9則) 最遠駅行貨車は、必ず直接組成線に分解する (10則) 仮預けは、なるべく先に分解した貨車のある線を利用する (11則) 引上最後の貨車は、機関車でもったまま操車する (12則) 仮預けした貨車を再分解する場合には、最終車を残しておく (13則) 緩急車留置線の適正をはかる (14則) 代用車は介在車留置線に仮預けすれば便利ながことが多い。

(2) 操車速度の向上法

第3法 入換機の荷重軽減法 (15則) できるだけ貨車を持たずに操車する (16則) 仮預けはできるだけ一括して、分解作業の初めに行う。

第4法 走行距離の短縮法 (17則) 雑放線には引上線に近い線を使用する (18則) 扱車数または使用回数の多い線は、組成線の近くにとる (19則) 仮預けは、仕訳線群の有効長外の部分を使用すれば便利である (20則) 貨車の突放距離の適正をはかる (21則) 入換機の引上距離の適正をはかる (22則) 突放は引上線のどの位置で行うか、適切な選定を行う (23則) 連結および引上回数をできるだけ減らす。

第5法 入換機の最小力率 (24則) 分解作業は、なるべく仕訳線群の鼻から奥に進める (25則) 組成作業は、なるべく仕訳線群の奥から鼻に進める (26則) 分解・組成とも能率的1回引上両数に留意する。

(3) 不要時間の短縮法

第6法 不要時間の削減法 (27則) 入換機の後退を、できるだけ少なくする (28則) 仮預けはなるべく手近な分岐点の定位線路を使用する (29則) 機関車および貨車の走行時分以外の時間の短縮をはかる (30則) 組成の基礎を早く作る (31則) 素直で簡明な操車方法を行う。

参考文献 山本龍也著 能率的貨車操車法 (昭和26年)。山本龍也著 山本式操車法解説並びにその理論 (昭和29年)。(内田 富彦)

やまもとちやたん 山元貯炭 石炭の産出される場所、あるいは炭坑の所在地における石炭で、他の商品の在庫に相当するものをいう。貯炭は他の商品の在庫に相当するものであって、その存在する場所によって山元(または坑所)貯炭、港頭貯炭、市場貯炭、工場貯炭等に分けられる。山元貯炭には坑所最寄の積出駅の貯炭も含まれ、また海岸炭坑の山元貯炭は場所的には港頭にあるが、山元貯炭として扱っている。なお山元貯炭は貯炭びん(ポケットと称している)にあるものと、その他のものとに分けられ、出炭されたものは一応ポケットに入り、ポケットから貨車積されるのを通例とする。(加藤礼三)

ヤム 貨車集配上の用語で、普通貨車の*無がい車(ト、トム、トラ、トキ)の略称。略号の出所は、屋根なし貨車の意味である。*ヤネの対称語。(笹 潤次)